

4月2日 四旬節第4主日

代下 36:11～23 エフェ 2:4～10 ヨハ 3:14～21

1. ヨハ

神はこの世から教会を救い出してこれに永遠の命を得させるために、その独り子イエス・キリストを十字架のいけにえとしてお与えになりました。

w.14-15 「そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。」

「信じる者」とは、ここでは何よりも先ず、この主イエス・キリストの御聖体に与かって罪の赦しと永遠の命をいただくために、主日のミサに集まって来ている信者たちのことを指して言っていることを、心に留めましょう。

“ミサに集まって来ている、洗礼の秘跡を受けたすべてのキリスト者は、永遠の命をいただいており、やがて神の国に復活するのだ”という確信と希望が、今朝の学びの主題であります。

既に久しい間、現代人の教会離れ、信仰離れが指摘されて来ました。いわゆる“世俗化”という表現がその説明のように使われて来ましたが、それは要するに、“ミサに集まる人々の数が少なくなって来た”、“人々の人生観や生活上の価値判断の土台が、信仰に代わって別のものになって来た”ことを指しています。確かにそれは20世紀の、特に20世紀後半に顕著な現象であったことは間違いありません。しかしここで少し観点を改めて考えてみたいと思うのです。私たちは社会学者や宗教学者としてではなくて、今朝ここにミサをささげるために集まって来ている一人一人のキリスト者として、このヨハネ福音書のことばに耳を傾けてみたいと思うのです。

w.17-18

この福音書の朗読を聞いているあなたは、ご自分をどちらの人間だと思えますか？ もしあなたが「信じていない者」であったら、今朝ここには来なかったはずではないでしょうか。そうです。「信じる者」とは、ミサに集まって来ている会衆一同のことなのだ単純に理解する素直さを、これから21世紀に向かう教会は回復しなければいけません！

ヨハネ福音書が生み出された一世紀末の教会の会衆も、今朝ミサをささげるためにここに集まって来ている私たちも、人間としては同じような者たち……、知識の点でも信心の点でもそんなに大きくは変わらない……普通の人々だ、と言ってよいと思います。ヨハネ福音書はそのような当時の会衆に向かって、“あなたがたは「信じる者」なのです”という前提で語っているのです。そして私たちも今朝ここにミサをささげるために集まって来ているのなら、“私たちも「信じる者」なのだ”と素直に理解して、このヨハネ福音書を読んでよいのです。

光を避けて闇へ向かう(w.19-20)……つまり“ミサに行かない”、“信仰をとうとしない”……強大な“この世”が、私たちの周りには存在しています。そのことは事実です。しかし、今朝ここに集まってい

る私たちは、ミサに参加してキリストの救いを受け、将来の神の国への復活の希望を与えられているのです。今朝ここに集まっているみんなが、「独り子を信じる者」(v.16) たちなのです。

2. エフェ

vv.4-6

私たちはミサの中でイエス・キリストの御聖体に与かるために、先ず悔い改めと信仰によって洗礼の秘跡を受けました。典礼憲章の14項は、すべての信者のミサへの参加について述べて、「キリストを信する民は、…… 洗礼によってこれに対する権利と義務を持っている」と言っています。

「罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし」(v.5) とは、このすべての信者が受けた洗礼の秘跡のことであり、それに続く「キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました」(v.6) はミサ、特にその中の感謝の典礼のことを指しています。ここで説明しておかねばならないことは、“地上の教会が主日ごとに守っているミサ、特にその中の感謝の典礼” は、将来の“神の国での天上の礼拝” のいわば先取りのようなもの、あるいはその保証(1:14 参照)なのだということです。地上の教会で私たちがささげているミサは、“天上の礼拝と結びついているのだ” ということ、v.6は言っているのです(典礼憲章8 参照)。

私たちはこのことを忘れてはなりません。ミサを司式する司祭は、「キリストの代理者としていけにえをささげ、神の民の集いを司会する」と説明されていますが(ミサ典礼書の総則4)、そのキリストとは“天上のキリスト” のことで、復活して今は父の右におられるキリストが、私たちのミサに臨んでくださるのです。やがて終りの完成の日には、私たちは神の国に復活して、天上のミサに参加する民となるのです。

3.

歴下の朗読と、それに続く今朝の答唱詩編(典28)は、このように神の国を待望しつつミサを守る私たちを励ましてくれます。特に答唱詩編で歌われた詩137は、神の国の別称である“天のエルサレム” での将来の礼拝を待望する信仰の歌として、古くから教会で愛唱されて来ました。

「信じない者」ではなくて、「御子を信じる者」である私たち会衆は、この“天のエルサレムを待望する歌” を歌って、復活祭儀に向かって今年の四旬節も備えて行きます。

アーメン。

4月9日 四旬節第5主日

エレ 31:31~34 ハブ 5:7~10 ヨハ 12:20~33

1. ヨハ

救われてミサをささげる民となった私たち教会にとって、イエス・キリストの十字架の死とそして復活は、最も重要であるだけでなく、最も深く私たち自身の救いに関わっています。

v.24 「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」

この節はイエス・キリストの死と復活を指していて、それによって神の教会が生み出されて来たということを語っています。しかしこの節は、ここではその“前後関係の中で”語られていることに意味があるのです。

祭りのときに……、ギリシア人たちがイエスのもとへ来ました。一世紀末の教会は、その大部分が異邦人たちの集まりでした。“ギリシア人”という呼び名は、ギリシア語を話す異邦人全体を表しています。イエス・キリストの死によって、そのような異邦人が罪から贖われて教会に集められ、ミサをささげる民となったのです。そのような、ミサをささげる会衆である異邦人たちに向かって、続く vv.25-26 が語りかけていることを理解しましょう。

私たちの救いは、主イエス・キリストの死と復活に深く関わっています。イエス・キリストを信じて洗礼の秘跡を受け、ミサをささげる民となった私たちは、主の死に結びつき、主の復活にも結びつくのです。イエス・キリストの救いは、私たちを死から救って、御自身の復活に与らせ、永遠の命に至らせてくださる救いなのです。

2. ハブ

vv.7-8

私たちが馴れ親しんで来た20世紀のキリスト教は、“イエス・キリストの死と復活”や“イエス・キリストによる罪と死からの救い”というような、キリストの福音の“死に対する戦い”としての面に、理解が足りなかったと言わねばならないと思います。「激しい叫び声を上げ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いをささげ……」という主イエス・キリストの歩まれた道は、ミサに集まる一般の信者たち自身の実感からは、縁遠いものだったのです。

日本だけではなくて、キリスト教を我が国に伝えてくれた西欧の世界でも同様に、「激しい叫び声を上げ……、死から救う力のある方に祈る……」というようなことは、久しく教会の信仰からは忘れ去られて来ているのです。

私たちの身近なところでこれまで行われて来た数々の教会の葬儀のことを思い起こしてみれば、そこで人々が“死”をどのように考えて来たかが分かります。そこでは“死は、大祭司である十字架と復活のキリストによらなければ、そこから決して救い出されることのない永遠の滅びである”ことなど、全く語られは

しませんでした。

私たちの救い主イエス・キリストは、しかし、私たちを罪と死から、神の怒りと裁きから救う大祭司となるために、「激しい叫び声を上げ、涙を流しながら、」御自身を十字架のいけにえとしてささげてくださったのです。

3. エレ

w.31-32

このエレミヤが語った“新しい契約”という言葉は、新約聖書は ルカ 22:20 と 1コリ 11:25 で、主の晩餐におけるイエスの聖別の言葉の中にとり入れて伝えていきます。

第二バチカン公会議によって刷新された私たちのミサ典礼書では、そこに採用された四つの奉獻文において、主の聖別のことばが聖書の記事からの編集によって、すべて同一であるように作られました。

「皆、これを受けて飲みなさい。これは私の血の杯、あなたがたと多くの人のために流され

て罪の赦しとなる、新しい永遠の契約の血である。これを私の記念として行いなさい。」

神とイスラエルとの間のかつての古い契約が破られて死んだように、救い主イエス・キリストは私たちの罪のために死んで、その血による“新しい契約”を教会に与えてくださいました。キリストの十字架は、この世を支配していた罪と死を滅ぼして、御自分の民である教会に永遠の命を与えてくださるのです。

「信仰の神秘。主の死を思い、復活をたたえよう、主が来られるまで。」(記念唱)

アーメン。

4月16日 受難の主日

イザ 50:4~7 フィリ 2:6~11 マコ 15:1~39

1.

私たちの主イエス・キリストの受難の物語りの朗読を、今年も聞きました。教会はその誕生の頃からずっと、特別に典礼暦のこの期節に、主の受難の物語りを語ったり朗読したりして来ました。教会の宣教の中で、この受難の物語りがどんなに重要であったかを理解するには、私たちは自分で聖書を開いてみれば分ります。マタイ福音書では 21-28 章、ルカ福音書では 19-24 章、そしてマルコ福音書では 11-16 章が主の受難と復活の物語りに当てられています。イエスの数々の説教をここに含めているヨハネ福音書では、実に半分を越える 12-21 章がこれに当てられています。

そのような訳で、現代の私たちの教会でも毎年受難の主日には、三年周期で共観福音書の中の受難物語りが朗読され、聖金曜日の祭儀では毎年ヨハネ福音書の受難物語りが朗読されています。

2.

教会がそれを聞き、代々にわたって受け継いで来た福音、そして今も教会が告白し宣べ伝えている福音によれば、神の救いの御業はかつてのイエスの宣教で完成して終わったのではありませんでした。“キリスト教とは、イエスの教え、つまりイエスの宣教された福音のことだ”と(誤って)単純に考えている人も、今年は聖なる過越の三日間の朗読聖書に、もう一度よく耳を傾けてみましょう。

福音書の受難物語りが、ミサではいつも旧約聖書と使徒書から選ばれたテキストと組み合わせて朗読されることには、重要な意味があります。教会が宣べ伝えている福音によれば、主イエスの十字架は神の救いの御業の最後を締めくくる出来事ではなくて、むしろ神の御業の決定的な開始の出来事であったからです。受難物語りの朗読は、それに続く復活の光に照らされて初めて、本当に福音になります。“キリスト教とは、十字架の福音のことだ”と多くの人が考えています。しかしそれは決して、主の受難で神の御業が完了してしまったという意味ではないことを、知らねばなりません。そうではなくて、“神の国の完成に向かう新しい時代が、主の受難と復活によって開始された”ということなのです。

3.

神の子である主イエス・キリストが、私たちの罪の贖いのいけにえとなるために、どんなにへりくだってくださったかを思いましょう。それは、私たち教会を罪と死の世界から救い出して御自分のものとしてくださった、父なる神のみ旨によることでした。御子イエスはイザヤ書に預言されている“主の僕”として、その使命のために「十字架の死に至るまで(父なる神に)従順」(フィリ 2:8)を献げられたのです。

ですから受難の物語りにおいて、主イエスは、大祭司に対しても、ピラトに対しても、また群衆に対しても、

2000年4月(主日B年)

ほんの僅かの言葉を口にただけで、むしろ黙々と十字架の苦難を受け入れて行かれます。しかしそれはイエスの使命の挫折でも、神の御業の終了でもありませんでした。そうではなくて、ここで決定的に、神の国の御業が開始されたのです。

「この人も神の国を待ち望んでいたのである」(マコ 15:43)。

私たちは今年も、キリストと共に神の国に復活する望みによって、聖なる過越と主の復活を記念し、また祝おうとしています。 アーメン。

4月23日 復活の主日

使 10:34~43 Iコリ 5:6b~8 ヨハ 20:1~9

今年も、主イエス・キリストの受難と復活からなる過越の聖なる三日間の典礼が、全世界の教会で厳かにささげられて、私たちは今日復活の主日を迎えました。

私たちの救い主イエス・キリストは、その過越の神秘によって御業を成就され、「御自分の死をもって私たちの死を打ち砕き、復活をもって私たちにいのちをお与えになりました」(典礼暦年の一般原 18)。私たち教会は、この期節に特に声を大にして、歓喜に満ちて“アレルヤ”を歌います(同 22)。

1. ヨハ

ヨハネ福音書が、主の復活の朝の出来事を取り上げているこの部分で語っている証言に、耳を傾けましょう。それは、ヨハネ福音書を生み出した一世紀末の教会が、使徒たちから受け継いだ証言であります。そこには「見て」「信じた」「まだ理解していなかった」という三つの表現が用いられています。

今世紀初め頃の聖書学の世界では、主イエス・キリストの死人の中からの復活について、“聖書の中にはその証拠を見つけることが出来るかどうか”という議論が行われて、それは私たち教会の信仰にとっていささかも良い結果をもたらさしませんでした。聖書の証言として、“学問的に”確実に言えることは、“この日の朝、墓は空であった”という事実だけだったからです。

しかしそれに続く今世紀の聖書学は、“聖書を通して語る教会のケユグマ(宣教)に耳を傾ける”ということを、私たちに教えてくれたのです。学問の世界と現場の教会との間には、いつも50年や100年の“ズレ”というものが存在するものです。公平に見て、ほとんどの現場の教会では、まだこのような今世紀の聖書学の成果の恩恵に浴していません。しかし21世紀の私たち教会は、20世紀の聖書神学から良いものを学んで、実りある成長を期待することが出来るのではないかと考えます。

今朝のヨハネ福音書のテキストの、先ほどあげた三つの表現も、このような初代教会のケリュグマ(宣教)の一部、しかもかなり重要な一部なのです。それは使徒たちによる主イエスの生涯と死と復活についての説明であったからです。

最初の弟子たちによるこれら一連の出来事への解釈は、彼らが自分自身で考え出したものではありませんでした。それは復活の主が聖霊を与えて、彼らに理解させたものでした。

“主は、死者の中から復活された。” ヨハネ福音書によれば、最初弟子たちはこの出来事を、またその重大な意義を「まだ理解していなかった……。」主の復活は、彼らの証言によって証明される性質のものではなかったのです。

“主は、死者の中から復活された。” 彼らは間もなく復活のイエスにお会いして、その姿を見ることとなります。しかしこの朝、彼らはただ空の墓を、主の遺体を包んでいた亜麻布を“見た”だけでした。そして間もなく彼らは“信じた”のです。しばらくして復活のイエスにお会いして、“信じるようになった”ので

す。これが教会のケリユグマ(宣教)なのです。

人々が“信じた”から、それで主が復活されたというわけではありません。人々が“理解した”から、それで主の復活は本当だったということになったのでもありません。ケリユグマ(宣教)は、弟子たちや教会が考え出したものではなくて、死者の中から復活された主が聖霊を与えて弟子たちに理解させ、教会に委ねてくださったものだったのです。

2. 使

使徒たちはイエス・キリストによる救いの出来事の証人(v.41)として、ケリユグマ(宣教)を語り、それによって最初の教会が誕生しました。“使徒継承”とは、この使徒たちによるケリユグマ(宣教)を含む証言を、教会が今日に至るまで受け継いで来ていることを言います。それは復活の主が現代の教会にも聖霊を与えて、受け継ぐことを委ねてくださっているものです。

v.42-43 「そしてイエスは、御自分が生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた者であることを、民に宣べ伝え、力強く証しするようにと、わたしたちにお命じになりました。また預言者も皆、イエスについて、この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しが受けられる、と証ししています。」

キリスト教会は、この使徒たちのケリユグマ(宣教)から始まりました。そして現代の私たちの教会も、その受け継がれたケリユグマ(宣教)を聞いて、今年の復活節を祝うのです。

聖書は使徒たちによる宣教の記録です。そのケリユグマ(宣教)は人からではなく、父なる神と御子イエス・キリストから出て、今も私たちに語りかけています。

今年も歡喜に満ちて“アレルヤ”を歌いましょう。

ハレルヤ、アーメン。

4月30日 復活節第2主日

使 4:32～35 1ヨハ 5:1～6 ヨハ 20:19～31

教会は今年も主イエス・キリストの復活を祝って、この期節のミサをささげます。

私たちが祭壇を囲んでミサをささげるとき、復活された天のイエス・キリストが私たちの中に来てくださって、自ら御自身の肉と血を永遠のいのちの糧として、私たちに与えてくださいます。ミサを司る司祭は、目に見えない復活のキリストの目に見える代理者として、神の民の集いを司式しているのです。

1. ヨハ

復活節第2主日には、毎年この同じヨハネ福音書のテキストが朗読されて、私たちは教会がその誕生のときからミサを守る群であったこと、そしてそのミサには復活された天のイエス・キリストが来てくださるといふ信仰を学んで来ました。

トマスの話は、“信じる”とは“私たちのミサの中に来てくださる復活のイエス・キリストに、私たちがお会いする”ことなのだということを、語っています。

v.29 「イエスはトマスに言われた。“わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。”」 目に見えないけれども信じている人々……、それがミサを守る会衆のことです。

2. 1ヨハ

“信じる”という言葉と“愛する”という言葉が、特にヨハネ文書では密接に結びつけて使われています。この“愛する”という言葉は、ミサをささげる群の中で、またミサをささげる群に向かって語られていることに注目したいと思います。“主イエス・キリストを信じる人々を愛し、洗礼の秘跡によって新しく生まれさせてくださった神を愛する”ことから、すべては始まりました。神が御子の十字架のいけにえによって、私たちが罪と死の支配するこの世から贖ってくださったからです。

v.1 「イエスがメシアであると信じる人は皆、神から生まれた者です。そして、生んでくださった方を愛する人は皆、その方から生まれた者をも愛します。」

“愛する”とは、救われた会衆が“共にミサをささげる”こと、“共にミサをささげ続けるために一致協力する”こととして、ヨハネ文書はこの言葉を使っていることを理解しましょう。ですから、私たちが主イエス・キリストの復活を祝って共にミサをささげているなら、私たちは互いに愛し合っていることとなります。主イエスが最後の晩餐の席で残された言葉は、「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい」(ヨハ 15:12)でした。

3.

2000年4月(主日B年)

教会が“共にミサをささげる神の民”として、主の再び来られる日まで地上の旅を続けて行くことが出来るように、復活のキリストは使徒たちをお遣わしになりました(ヨハ 20:21-23)。彼らの使命は福音を宣べ伝えること、洗礼の秘跡を行うこと、ミサを司ることでありました。この使命を今日も受け継いでいるのが世界各地の司教であり、彼らに従属する司祭たちと共にその任務に奉仕しています。

司教、あるいはそれに従属する司祭が洗礼の秘跡を行うとき、またミサを司るとき、そこに聖霊が働きます(1ヨハ 5:6)。私たちのミサの感謝の典礼の中で司祭が唱える奉献文には、エピクレーシスと呼ばれる部分があって、特別に聖霊の働きを祈るのですが、その一つは「あなたにささげるこの供えものを、聖霊によってとうといものにしてください。御子わたしたちの主イエス・キリストの御からだと御血になりますように」であり、もう一つは「御子キリストの御からだと御血によってわたしたちが養われ、その聖霊に満たされて、キリストのうちにあって一つのからだ、一つの心となりますように」(第三奉献文)です。

そして、ささげ物を携えてミサに参加する私たちも、「世の罪をあがなう御子の奉献に、わたしたちが一つに結ばれますように」(主の洗礼の祝日の奉納祈願)と祈ります。

“信仰に生きる”(今朝の集会祈願)ことは、“愛すること”、“共にミサを守り続けるために一致協力すること”です。

主の復活を祝って、ハレルヤ！ アーメン。